

小児2例の6症例であり手術時には、全て陳旧性であった。

治療法は、術前にX線写真にて骨折部および下歯槽管の解剖学的走行、永久歯胚の位置の確認など十分な検討を行い、AO式金属プレートを使用して整復固定を行った。また患部の安静をよりはかるために、顎間固定を約2～3週間併用した症例もあった。これによる咬合障害も少なく、早期に経口的に食餌を摂取できる様になり、術後および退院後の診査においても金属プレート装着付近の骨は、加圧による骨壊死もなく、正確でかつ強固な固定により骨折部には外仮骨の形成も見られず良好な咬合関係が得られた。

以上、全例とも術後現在に至るまで、何ら不快症候もなく経過しているので報告した。

質問：甘利英一(小歯)

1. 小児の症例は何例か。
2. 各々の小児の年齢は。
3. 16歳頃までの追跡ののちの様子を知らせてほしい。

質問：菅原教修(保存2)

先程の報告例の中で関節頭を一度とり出し、その後もどしてから整復固定をした例がありましたが開咬障害などはみられませんでしょうか。

回答：渡辺充泰(口外1)

甘利先生に

1. 2例です。
2. 3才と6才です。
3. はい。

菅原先生に

1. みられませんでした。

#### 演題14 頭頸部のCT診断

○高田 泉, 前田 光義, 円谷 安一  
松尾 芳明, 柳沢 融\*

岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座

岩手医科大学医学部放射線医学講座\*

岩手医大では、昭和52年10月より55年1月までに、約6,000例のCT検査を行ってきた。今回は、歯学部で撮影した症例のうち数例について、一般写真との比較、<sup>67</sup>Ga-citrate scan像との比較、造影剤の使用などを行って、CTの口腔外科領域での有用性を検討したのでその結果を報告した。

使用装置としてはEMI社製EMI-1010とGE社製の2CT/T機種を用いた。

結果

#### 1) Water's view とCT像の比較

51才男性右上顎癌の患者においてWater's viewとCT像の比較を行った。この症に例においてCT像はWater's viewよりも明瞭な画像を構成した。

#### 2) P-A方向 Tomography とCT像の比較

1)と同一患者でconventional tomographyとCT像を比較したが、CTの方が明瞭な画像を構成した。

#### 3) <sup>67</sup>Ga-citrate scan 像とCT像の比較

<sup>67</sup>Ga-citrate scan像の集積部に一致してCT像でもhigh density areaが認められた。

#### 4) 造影剤の使用の有無に関する比較

62才男性及び52才女性、共に右上顎癌の患者について、造影の有無の比較を行った。造影剤の注入により腫瘍の局在、進展方向が明瞭となった。

#### 5) 上顎癌進展例におけるCT像

56才女性、右上顎癌の進展例において、眼球の突出、脳への進展等が明瞭に認められた。

#### 6) 上顎癌患者の初診、開洞手術後、開洞手術より2ヶ月後のCTを比較し、予後判定を行った。

各ステップでのtumorの変化が明瞭に描写され、CTが予後判定にも有用であった。

#### 7) 下顎骨骨折のパノラマ写真とCT像の比較及び、術後性上顎嚢胞とCT像の比較

下顎骨骨折ではパノラマとは別の角度から骨片の変位等を認識でき、又嚢胞ではCT像はWater's viewよりも明瞭に嚢胞を描写していた。この事よりCTが悪性腫瘍以外にも有効であることが認識された。

追加：村井竹雄(歯放)

1. 医学部病院中央放射線部部长は私共の前任教授柳澤教授である。かかる恵まれた条件の下で、私共は今後も教授の御指導をいただきつつ演題に関連する業績をつみ上げる努力をしたいと考えている。

質問：佐藤方信(口病理)

CTによる良性腫瘍と悪性腫瘍の鑑別に関して御意見をうかがいたい。

回答：高田 泉(歯放)

腫瘍の悪性と良性の区別は、まだはっきりとはできない。その部の組織が水か脂肪か軟組織かという位までの分析しかできないが、悪性では周囲骨の破壊が認められ、良性では膨隆していくような感がある。

また、直径1cm以下のものでは解析できない。